

・白選五十首・



高野公彦

たかの・きみひこ 1941年、愛媛県生まれ。67年、東京教育大学卒業。河出書房新社編集部を経て、現在、青山学院女子短期大学教授。歌は、宮修二に師事し、「コスモス」に所属。同人誌「棧橋」編集人。平成12～13年度NHK歌壇選者。歌集は『汽水の光』『水行』『天泣』（牧水賞）『水苑』（迢空賞）などがある。

青春はみづきの下をかよふ風あるいは遠い線路のかがやき
 スクラムを組みつつ触れしひとの乳房やはらかかりき罪のごとくに
 朝羽^{あさ}振り姉は飛びゆき夕羽ふり帰りこざりきこの庭^への上に
 風いでて波止^{はと}の自転車倒れゆけりかなたまばゆき速吸^{はやすひ}の海
 飛込台はなれて空^{くう}にうかびたるそのたまゆらを暗し裸体は
 少年のわが身熱^{しんねつ}をかなしむにあんずの花は夜も咲^{ひら}きをり
 あかあかと天のみどをくだりゆく落暉^{らくき}に向ひつつしみぞする
 ぶだう呑む口ひらくときこの家の過去世^{くふこせ}の人ら我を見つむる
 白き霧ながるる夜の草の園に自転車はほそきつばさ濡れたり
 みどりごは泣きつつ目ざむひえびえと北半球にあさがほひらき
 精霊^{けんれい}ばつた草にのぼりて乾きたる乾坤^{けんこん}を白き日がわたりをり

「水木」

「汽水の光」

歌を白選しながら各歌集のあとがきを読んでみると、その時その時の心境が述べられている。幾つか抜粋しよう。

「この時代の作品を読みかへしてみると、懐疑的、厭世的かつ厭生的、また内向的、といったやうな自分の性向が、改めてつくづくと分つてくる。仕方ないことだ。私は、終始うつむきかげんに自分の青春を歩いてゐたのだつた。」「水木」

「私の生れた町は、四国山脈から流れくだつてきた河が瀬戸内海にそそぐ、その河口にある小さな町で、私は海と河と汽水の明るい光の中で育つた。父と母を残し、その町を離れてから十五年以上たつが、歌をつくる時は今なほ故郷から懐かしい光が差してくる。」「汽

月てらす河を踰えつつししむらのうちなる鳥も目をひらきををり

ふかぶかとあげひばり容れ淡青たんじやうの空は暗きまで光の器

ビルディングの入りほひの扉うす青く人が押さぬとき死者もた凭れをり

海に出てなほ海中かちゆうの谷をくだる河の尖端を寂しと思ふ

方位なき暗闇のなか寝返ればうるのおくやまゆめ揺れにけり

電柱に昼を街燈の点ともしりをり臓器外臓器のごときさびしき

海べりの馬小屋に馬は眺めるつ海原に棲む青きひかりを

ひえびえと穀雨こくうは降りぬ地方出身都市生活者われらの上に

妻子つまこ率て公孫樹のもみぢ仰ぐかな過去世・来世にこの妻子無く

夜ざくらを見つつ思ほゆ人の世に暗くただ一つある〈非常口〉

語尾ながく曳きてやはらかに会話する伊予の国びとは角つひなしにあはれ

兩月の夜蜜の暗さとなりけり野沢凡兆その妻羽紅うこう

受粉じゆふんして白ふぢの花瞑目す遠くしづかなる漂鳥のこゑ

夜の暗渠あんきよみづおと涼しむらさきのあやめの記憶ある水みづの行く

たましひの手くらがりにて人の世のひとりにてがみ書きるたりけり

ふるさとの木に近づけば蟬黙るそんなに恐くないさ僕だよ

目つむれる女人を抱けば息深き女体となりぬあはれノア・ノア

にんげんの水行の跡すべて消し海はしづけきひかりの平たひら

戦火映すテレビの前に口あけてにつぼん人はみな鬮
しんしんと体のなかの風ぐるま回りて我は滝に近づく

【淡青】

水の光

「(雨月の夜の) 深い暗闇の涯にはいはば不可視の満月が照りかがやいてゐる。だから、雨月の夜の闇は、濃密で香ぐはしく、エロティックですらある。私はその闇の底に一對の男と女を想起して歌を作つたのだつた。こんなあやしい風景は、若い頃には思ひ浮ばなかつた。中年にさしかかつたゆゑの妄想である。」

【雨月】

「人間はいま空を飛び、また、すさまじい速度で地上を移動する。さうしたスピード時代に、〈水行〉といふ言葉は、とりわけ優しくひびく。やすらぎと、ほのかな孤独感を帯びたこの言葉に魅かれて書名とした。」『水行』
そして最近の「水苑」では、「この期間、生活に大きな変化はなく、ただ普通に生き、普通に年を取つた。つまり、少し老いたのである。老いは、かすかに身に現れ、そして心に淡い悲哀感をもたらしした。」と記している。

内容はさまざまだが、これらを読むと、やはり自分は内向的人間なのだと思う。私は、自分の内側を覗き込んで、〈生と死〉を生み出すこの世の時間というものを見ようとしてきたつもりだが、作品がそれを実現しているかどうかは、よくわからない。

【地中銀河】

地中銀河と言はば言ふべし富士山の胎内ふかく行く寒き水

暗黒にほたるの舞ふはやはらかき草書のごとしひかりの草書

怠けたく酒が飲みたく遊びたく羊腸とせり五十のころ

* ホモ・ファベル悲しきかなや原発は悪魔がそそのかした美酒

* 道具を作る人間

厄わざはひひの一つ人工衛星が用すみて空の粗大ゴミとなる

「般若心経歌篇」

浄き火の在ありど処とおもふブラウスの柔若乳の二つふくらみ

死は我の一生ひとよの伴侶 ラッセ、ラッセ、ラッセ、ラッセと跳人踊る影

我を生みし母の骨片冷えをらむとほき一墓いちぼ下一壺いちちゆう中にて

「天泣」

やはらかきふるぎ日本の言葉もて原発かぞふひい、ふう、みい、よ

転生のはざまのあはき生なりや紫蘇の葉わたる足細小蜘蛛

杖つきて歩く日が来む　そして杖の要らぬ日が来む　君も彼も我も

天泣てんきよのひかる屋すぎ公園にベビーカーひとつありて人ゐず

滝、三日月、吊り橋、女体　うばたまの闇にしづかに身をそらすもの

パイオリンを顎で押さへて弾く見れば演奏は濃き愛撫に似たり

「水苑」

梨の花ましろに咲けり地下の根は大きなチェロを抱きてかあらむ

つゆくさの藍の眸めならぶ朝の道色街をゆくごとく歩めり

左手で文字書きてるし教へ子を思ひ出さすよ黄のフリージア

太幹に蟬とびとびにゐる真昼横這ひしつその一つ消ゆ

水苑すいゑんのあやめの群れは真しづかに我を癒して我を拒めり